江戸の街道探訪第9回

東海道（７）草津から京都

瀬田唐橋

* 草津宿を出立。東海道は、琵琶湖の南縁を西へ流れる。まもなく瀬田川にぶつかる。この川は琵琶湖の南端から流れ下る、幅広い浅瀬の川。ここに架かる橋はとてつもなく長い。これが歴史上有名な瀬田唐橋である。橋は二つに分かれる。向こう岸から小島までの小橋が５２ｍ、そしてこちらの岸までの長い橋、大橋が１７２ｍである。計２２３．７ｍ（現在）。この橋は古代から幾度も架け直されており、橋の長さは、橋の掛け方によって異なる（江戸の文献で１９６間（３５５ｍ）というのもある）。とにかく長い橋である。
* 瀬田の唐橋。唐橋の名の由来。大昔には、丸木舟を並べ、それを藤ノ木の蔓で結んだ。その時、人々は「」と呼んだ。その「からみ橋」がなまって、「から橋」とよばれるようになったという。
* この橋は歴史上、幾多の戦乱の舞台となった。橋は琵琶湖を渡る、都の出口であったからである。ことわざ「急がば回れ」は、この橋から創られた言葉。京都に行くには、琵琶湖を渡るか、この橋を渡るしかない。琵琶湖を渡った方が距離的には短いし､近い。しかし舟は天候次第で欠航する。遠回りの大橋渡りの方が確実。　そこで「急がば回れ」。

唐橋の歴史

* 瀬田唐橋はなんと古代、天智天皇のころに（６６７年）架橋された橋という。以後、都を守る軍事の要衝となる。「唐橋を制する者は天下を制す」。ために唐橋を舞台に繰り広げられた戦は、壬申の乱､承久の乱、建武の乱など枚挙に暇がない。その度に橋は焼き落とされては、架け直されてきた。橋の位置も度々変えられている。
* 江戸時代の唐橋の原型を造ったのは、織田信長である。小島を挟んだ小橋、大橋。琵琶湖東岸に安土城を構えた信長にとって、この橋は、重要な戦略拠点だったのである。その後、記録によれば、江戸時代の100年間（１７９５〜１８９４）で、なんと18回も架け替えされている。
* 家康は東海道を整備するに当たって、瀬田唐橋のみ架橋を認可。東海道を通る橋とした。
* 瀬田の唐橋は、京都の宇治橋、山崎橋（淀川）と並んで日本三大橋のひとつとされてきた。夕日、月見の名勝でもある。広重の「近江八景、瀬田の」は、周囲の景観と長い橋を見事に表現している。石山寺方面から琵琶湖を望む夕照で、琵琶湖には沢山の帆船が走り、夕焼けのシルエットのように長い唐橋が描かれている。京都よりの小島までが小橋で、小島から対岸までの長い橋が大橋である。夕日にシルエットのように描き出された琵琶湖を囲む山々の風景景色。広重の傑作である。
* ■1）広重：「瀬田の夕照」：夕日に沈む瀬戸唐橋。琵琶湖に浮かぶ帆船。右上の富士は東の方角を示す広重流の巧みなレトリック。
* この橋はまた宇治橋とともに「名月所見」の処として有名であった。東海道を歩く旅人が橋の欄干から月と周囲の風景に見とれたところでもある。広重は、「石山秋月」と題して、石山寺から唐橋、琵琶湖を望む月夜を描いている。奇岩の山、豪壮な寺社、紫式部が源氏物語を書いた処として有名なあの石山寺。絶景である。そこは長い瀬田の唐橋を渡って左に曲がれば、すぐにある。なんにしても瀬田唐橋は、琵琶湖と相まって、すばらしい景観を演出している。芭蕉の一句。「五月雨に隠れぬものや瀬田の橋」（五月雨に降り込められて何もかもぼうと霞んでいる。その中で瀬田の大橋だけはさすがにどっしりと立っている。）
* ■2）広重：近江百景：「石山秋月」：左半分は石山の奇岩。石山寺の社。遠くに瀬戸の唐橋。その先に、比叡山。月夜の絶景。

大津宿

* 瀬田唐橋を渡る。左を見ると石山寺が見える。東海道は右へ。琵琶湖に沿って北へ。若宮八幡神社を通過し、さらに行くと、石場に出る。石場の港は草津の港から舟に乗って琵琶湖を渡船してきた旅人の仲間と落ち合うところである。すぐ近くに古代の大津京の跡がある。さらに北に歩を進め、まもなく西へ転じる。すぐに追分に出る。ここが辻の札。右は北国街道。左へ曲がると、そこは大津宿である。草津宿から徒歩14キロ。ここは嘗て天智天皇が大津京を開いた古都（奈良から遷都）。京都から東へ９．８㎞。東海道、北国街道、中山道を使う旅人が最初に使う宿場でもあり、大いに発展した。本陣２，脇本陣１，旅籠屋７１。広重の大津宿の絵には、江戸に近い賑わいが感じられる。遠く眼下に琵琶湖が描かれ、何艘もの帆が浮かぶ。そこから坂を登りつつ、連綿と連なる家々、店、旅籠。大津は北国及び湖周辺の産物集散地。人出も多いが、荷を満載した牛車の列が描かれている。
* ■3）広重：大津宿の賑わい。遠方に琵琶湖。坂上に連なる旅籠、店。牛車の列。釣り看板が面白い。

京都三条大橋へ

* 大津宿大塚本陣前を通って大津宿を出る。東海道は、山林を突っ切って西へと進む。そこには嘗て有名な逢坂の関があった。つまり此処はその昔から交通の要衝であったのである。逢坂の関跡から山間部から抜け出ると、そこは京都山科である。四の宮まで来ると東海道は旧三条通りと交錯。連れ合うように都に向かう。やがて右側に広大な天智天皇陵が見えてくる。そして粟田口。ここは京都の東門にも当たる地域で繁栄を見た。交通量も多い。にもかかわらず、この辺り東海道の難所の一つとされた。それは道悪である。人馬道と車道があったが、牛車が泥濘にはまり、立ち往生することしばしば。そこで江戸後期には車道に石の舗装がなされた。これを車石という。さらに道路のあちこちに灯籠が立てられた。左に粟田口刑場。江戸時代、鈴ヶ森刑場と同じく、街道筋の見せ物的存在。粟田口を過ぎると、京の都にまっしぐら。左手に、広大な知恩院の森が見え、その奥には清水寺。右手に南禅寺。すぐに東海道の終点、前方に鴨川に架かる三条大橋が見えてくる。

三条大橋

* 三条大橋は江戸時代、最も交通量が多い橋。橋は室町期に架橋され、秀吉が修復、架橋。石の橋脚土台、木製の高欄にをつける。家康は東海道を日本橋から三条大橋までと設定すると、この橋を徹底強化した。結果的には、度重なる鴨川の氾濫もあり、江戸時代、35回も改修工事を実施している。そしてついには河床一面が敷石で固められることとなった。
* 三条大橋は、京の繁栄を象徴する橋で、旅人は東口に立って左を見れば八坂神社、祇園の賑わいを、橋を渡って西口左を見れば先斗町の洒落た雰囲気を感じたに相違ない。いずれにせよ、東海道を旅してきた江戸っ子にとっては、京の都の雅を肌で感じたことであろう。

広重の「三条大橋」の絵は、華やかな色彩にあふれている。橋の向こうに東山。その中間に清水寺。東山の背後に比叡山が描かれている。これらの山は本来、橋の右、東側に南北に並んでいるのだが、京の都の雰囲気を味合わせる広重流の見事な演出である。

■4）広重：東海道の終点、三条大橋。右が東。美しい鴨川の流れ。大原女や京女が行き交っている。